

【いじめの未然防止に関わる「知っておきたい基礎知識集」】

学校において、いじめ未然防止モデルプログラムを活用しながら、いじめの未然防止に向けた取組を推進するに当たって、知っておくとよい言葉や、活用できる手法及び考え方についてまとめました。モデルプログラムとともに御活用ください。

目次

①自己有用感	P 1
②ピア・サポート活動	P 2
③構成的グループエンカウンター	P 2
④アサーショントレーニング	P 3
⑤リーダーシップ、フォロワーシップ	P 4
⑥児童生徒理解に活用できる資料	P 5
⑦生徒指導と積極的な生徒指導	P 6
⑧いじめの未然防止とボランティア活動	P 7
⑨家庭や地域社会との連携及び特色ある教育活動の地域への発信	P 8
⑩生徒指導と道德教育の関わり	P 9

【☆コラム】

・「絆づくり」と「居場所づくり」	P 1
・いじめの未然防止に関わる取組	P 3
・いじめの未然防止と校内研修	P 5
・いじめのアンケート	P 6
・生徒指導と学習指導の関わり	P 7
・解決志向アプローチの考え方	P10

① 自己有用感

自己有用感については次のように示されています。

自己有用感とは	出典
他者の存在を前提として自分の存在価値を感じる、誰かの役に立てたという成就感や誰かから必要とされているという満足感のこと。	「生徒指導支援資料3」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、平成23年6月）
「自尊感情」や「自己肯定感」といった自分から自分への評価ではなく、自分の行ったことを他人から認めてもらった、自分が相手にした働き掛けを相手から評価されたというように、相手の存在が前提となって生まれてくる感情。	「いじめについて、正しく知り、正しく行動する。」（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、平成25年7月）

特別活動指導資料「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」（文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター H26）

「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた等、自分に対する他者からの評価が中心であり、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」とは異なります。最終的には、自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされるという点がポイントです。

自己有用感とは、単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるようにがんばりたい」という形の自信です。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、様々な活動を通して、「清掃をしっかりとやっていたね、と友達が言ってくれたので、これから毎日このことを継続しよう。」「下級生がありがたうと言ってくれたので、これからもしっかりと頑張ろう。」などといった自己有用感を育むことができるよう工夫されています。大切なことは、全ての児童生徒が、教師や活動に関わった大人、友達に、活動中や活動後に肯定的な評価をしてもらうことです。モデルプログラムにおける実践では、活動の後に、振り返りやシェアリング（活動を振り返り感想や気付いたことなどを交流すること）の場面を位置付けています。

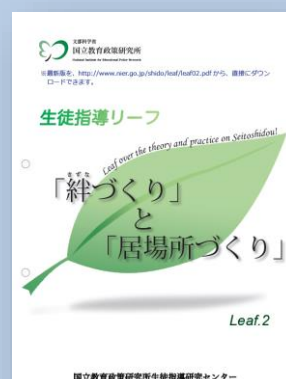
☆コラム 「絆づくり」と「居場所づくり」

いじめ未然防止モデルプログラムに掲載されている活動は、その活動の内容や主体となる対象によって、「居場所づくり」「絆づくり」「環境づくり」の大きく3つの観点により分類されています。

「居場所づくり」と「絆づくり」の詳細については、国立教育政策研究所「生徒指導リーフ Leaf.2」に記載されています。

「環境づくり」は、教職員・児童生徒全員で学習規律の定着を図り、学習環境及び学校環境を整備する、として北海道教育委員会が独自に示したオリジナルの観点です。

各学校においては、3つの観点をバランスや、年間を通したいじめの未然防止の取組となる計画的な推進の在り方について留意する必要があります。



②ピア・サポート活動

「ピア」とは児童生徒「同士」という意味です。児童生徒の社会的スキルを段階的に育て、児童生徒同士が互いに支えあう関係を作るためのプログラムです。「ウォーミングアップ」「主活動」「振り返り」という流れを一単位として、段階的に積み重ねます。

生徒指導提要（文部科学省 H22）

道内の学校においても、児童生徒同士がお互いの悩みをしっかりと受け止め、解決していく力を付けることで、いじめに悩む子や、登校をしづんだり、友達関係をうまく結べなかったりする児童生徒が少なくなるよう、トレーニングを受けた児童生徒が中心となり仲間として友達を支え合う、ピア・サポート活動が実践されています。

また、ピア・サポート活動の示す考え方をより広い視点から捉えることにより、いじめや不登校などだけではなく、「数学が分からなくて困っている」「けがで松葉杖を使わなくてはいけないので、荷物を持てなくて困っている」「転校したばかりで学校の様子が分からなくて困っている」などの日常の学校生活の様々な場面に対する支援もサポート活動として考えることができます。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、異年齢集団における交流などといった、いわゆる「お世話活動」といった形で、ピア・サポート活動を紹介しています

③構成的グループエンカウンター

「エンカウンター」とは「出会う」という意味です。グループ体験を通して他者に出会い、自分に出会います。人間関係作りや相互理解、協力して問題解決する力などが育成されます。集団の持つプラスの力を最大限に引き出す方法といえます。学級作りや保護者会などに活用できます。

生徒指導提要（文部科学省 H22）

生徒指導提要において、グループエンカウンターは、「教育相談でも活用できる新たな手法等」として示されており、比較的容易に学級単位で実践できる手法として、参考例や実践例が多く紹介されています。

道内の学校でも、実践されているところですが、国立教育政策研究所の「生徒指導リーフ Leaf.2」では、「教師主導のエクササイズやトレーニングを繰り返すだけでは、『絆づくり』にはならない。教職員が『絆づくり』を『してあげる』『させる』という発想を捨てる。」と示されています。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、SGEについては、教師が主体となっていくことから「居場所づくり」に位置付けています。いじめの未然防止に向けて一層効果的な取組となるよう、学級目標を考える前や、学校行事の前後に活動のねらいを達成するための手段の一つとして、SGEを行うなど、SGEの活用の仕方を工夫することが大切です。

④アサーショントレーニング

「主張訓練」と訳されます。対人場面で自分の伝えたいことをしっかり伝えるためのトレーニングです。「断る」「要求する」といった葛藤場面での自己表現や、「ほめる」「感謝する」「うれしい気持ちを表す」「援助を申し出る」といった他者とのかわりをより円滑にする社会的行動の獲得を目指します。

生徒指導提要（文部科学省 H22）

アサーションとは、「自分も相手も大切に自己表現」であり、自分の考え、欲求、気持ちなどを率直に、正直にその場に合った適切な方法で述べることをいいます。アサーションができるようになるためのトレーニングがアサーショントレーニングです。

アサーショントレーニングを実施するほかにも、日常の学校生活の様々な場面で、教師が児童生徒に対して次のような、アサーションの考え方を生かした言葉掛けを行うことも大切です。教師が普段から、このような指導を行うことで、学級の雰囲気や人間関係がより好ましいものとなります。

「誰でも自分の意見をもつことができるよ」
「あなたはそのままのあなたでいいよ」
「あなたと同じように大切な他の人の声にも、しっかり耳を傾けてごらん」
「ものの見方や考え方を変えたりこだわりを捨てたりすると、気持ちが軽くなることもあるよ」
「言い方を工夫すると、友達とうまくいくよ」 など

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、教師による温かい働き掛けが基盤となる「居場所づくり」、児童生徒同士のよりよい人間関係が基盤となる「絆づくり」のそれぞれにおける活動を支え、活動がより充実することが期待されることから、アサーショントレーニングを学校全体で取り組むことが望まれます。

☆コラム いじめの未然防止に関わる取組

「いじめは人間として絶対に許されない」という意識を一人一人の児童生徒に徹底させるとともに、教師自らそのことを自覚し、保護者や地域に伝えていくことが必要です。

いじめは、児童生徒が学校の内外を問わず、同じ学校・学級や部活動、少年団活動などを通じて関わり合う仲間や集団など、何らかの人的関係における問題であるという視点に立ち、その未然防止については、生徒指導はもとより、特別活動などの体験学習などを通じて、児童生徒同士の心の結びつきを深め、社会性を育む教育活動を進める必要があります。

そこで、いじめ未然防止モデルプログラムにおいては、各学校が、様々な教育活動を通じて、いじめの未然防止に関わる取組を推進できるよう工夫を図っています。

⑤リーダーシップ、フォロワーシップ

フォロワーシップとは、集団の目的達成に向けてフォロワー（リーダーを補佐する人のことで、チームメンバーのこと）がリーダーを補助していく機能のことです。

リーダーシップとは、集団をまとめながらその目的に向かって導いていく機能のことです。

特別活動指導資料「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」（文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター H26）

異年齢集団における交流等を通して、上級生にリーダーシップ、下級生にフォロワーシップを育てることができます。

上級生に対しては、例えば、①大きな声で自信をもって話す、②誰が何をするか明確に指示を出す、③下級生のモデルとなる行動をする、④思いやりの心をもって関わることなど、リーダーとしての心構えを植え付け、下級生に対しては、例えば、①上級生の指示に従い協力する、②自分にできることは何かを考える、③困ったときはリーダーに相談する、④みんなと仲よく協力し合うなどの心構えを植え付けることができます。

異年齢集団による活動例として、「遠足」、「運動会」、「学芸会・学習発表会・学校祭」、「集会」、「清掃活動」、「日常の学校生活（遊び、挨拶運動、給食、校内掲示）」、などが考えられます。

異年齢集団の交流活動を効果的に進めるためには、児童生徒が「楽しい」と感じるとともに、「関わり合う喜び」が獲得できる活動となるよう工夫することが大切です。特に、上級生に対してリーダーシップを育て、「自己有用感」を実感できるようにするために、自分の役割を自覚させ一生懸命に行動したことが下級生の役に立った、また手本になったと感じられるような働き掛けが大切です。

また、下級生のよりよい成長につなげるために、上級生がしてくれたことに感謝し、「自分もあのような上級生になりたい」とあこがれをもたせることができるようにすることも大切です。

一方、異校種間連携においても、同様のねらいで実施することができます。異校種間連携によって、小1プロブレムや中1ギャップ、高1クライシスなどの未然防止につながることから、このような、児童生徒の人間関係や経験を広げるなど広い視野に立った適切な教育活動を進めていくことが必要です。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、小・中学校を中心に異年齢集団による交流を位置付けて、リーダーシップやフォロワーシップを育てる活動を紹介しています。このような活動においては、上級生に活動の全ての任せるのではなく、準備から反省に至るまで、教師のきめ細かな指導も必要です。また、このような活動の振り返りにおいては、それぞれの立場がそれぞれ成長したことを実感させるだけではなく、集団に所属するメンバーが、各自の役割を果たすことで全体に貢献するといったメンバーシップを育成する視点にも立ち、全ての児童生徒が活動のねらいを達成できたことを理解させる指導が必要です。

⑥児童生徒理解に活用できる資料（「子ども理解支援ツール『ほっと』」や「Q-U」、「アセス」）

生徒指導における児童生徒理解は、指導に役立つものでなければなりません。

そのためには、児童生徒理解においては、まずその理解の仕方が客観的で正確でなければなりません。誤った理解や独善的な理解からは正しくかつ有効な指導が導かれるはずはないからです。できるだけ多角的・多面的でかつ客観的な資料を得ようと努力しなければなりません。

指導に役立てるためには、得られた資料をいかに記録し、整理するかということも極めて大切です。

生徒指導提要（文部科学省 H22）

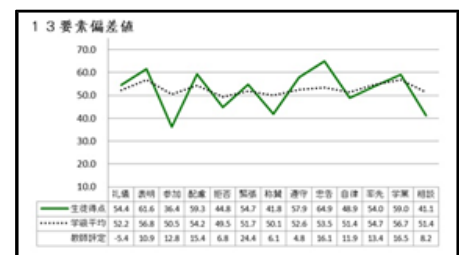
児童生徒理解は、主観的な理解から客観的な理解、さらに共感的な理解へと進めていくことが大切です。多角的・多面的でかつ客観的な理解により、児童生徒理解を深めるための資料として、例えば、「子ども理解支援ツール『ほっと』」（北海道教育委員会と北海道医療大学が共同で開発）や「Q-U」、「アセス」など挙げられます。

いじめの未然防止においては、全ての教育活動において、児童生徒が、自分の思いや考えを適切に表現したり、思いやりの心をもって他者と関わったりするなど、よりよい人間関係を築く力を高めていくことが大切です。そこで、「ほっと」や「Q-U」、「アセス」といったツールを活用し、児童生徒の状況を把握し、指導に生かしていくことが考えられます。

「ほっと」は、児童生徒の発達の段階に応じて、身に付けるべきコミュニケーション・スキルを内容の中心としていくところに特色があり、児童生徒のコミュニケーションに関する実態を把握できます。

「Q-U」は、児童生徒にアンケートを実施し、学校生活の満足度や意欲、学級集団の状態を把握できます。

「アセス」は、児童生徒にアンケートを実施し、児童生徒が学校にどの程度適応しているかを把握できます。



〈13要素偏差値（「ほっと」から）〉

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、主に「年間の取組計画例」の備考欄において、「児童生徒理解に活用できる資料」を定期的に活用し、児童生徒の変容をとらえ、全ての教師で共有したり、主観的理解と客観的理解のずれについて検討したりして、学級経営や教科指導等の改善・充実に生かしていることを分かるよう示しています。「ほっと」や「Q-U」などを実施することが目的となるのではなく、実施し分かった結果を生かすことが大切です。

☆コラム いじめの未然防止と校内研修

いじめの未然防止の取組は、日常の教育活動の中で推進するため、全ての教師が共通の視点を持ち、年間を通して計画的に行うことが必要です。そのために管理職や担当教師のリーダーシップ及びマネジメントのもとで、いじめの未然防止の必要性やその取組の在り方について、全ての教師と一緒に理解を深める校内研修を行うことが大切です。

校内研修の一つとして、共通の視点のもと、理解を深め、日常の教育活動をいじめの未然防止の視点で見直すのに活用できる「マトリクス」や、取組の時期や内容が一目で分かる「年間の取組計画」を全教師で作成することも効果的です。

そこで、北海道立教育研究所は、「いじめ未然防止モデルプログラム 校内研修パッケージ」を作成し、Web ページに貼り付けましたので、是非御活用ください。

⑦生徒指導と積極的な生徒指導

各学校においては、生徒指導が教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要です。

生徒指導提要（文部科学省 H22）

日々の教育活動においては、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することに留意することが必要です。

一方的に、教師の考えを押し付けたり、恫喝して教師の考えを理解させようとしたりするのではなく、信頼関係のもと、児童生徒と教師が問題の解決等に向けて、一緒に考えるなどといった姿勢が大切です。

生徒指導を進めるに当たっては、問題行動の防止や非行対策といったいわゆる「消極的な生徒指導」ととどまることなく、児童生徒の人格の発達を促す「積極的な生徒指導」を進めることが大切です。

「積極的な生徒指導」とは、問題行動等の未然防止に向けた予防的な指導や相談、児童生徒の成長を促す生徒指導のことをいい、開発的・予防的な生徒指導とも言われます。例えば、体験活動、ボランティア活動や児童会・生徒会活動などの自主活動、交通安全指導や非行防止教室の実施、教育相談体制の充実などがこれに当たります。

一方、「消極的な生徒指導」とは、問題行動等が起こったとき、その対応や事後指導、相談といった生徒指導のことをいい、治療的・対症療法的な生徒指導とも言われます。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、紹介している活動の全てが、いじめが起こりにくい学校づくりを推進するため、「積極的な生徒指導」の考え方に基づいている、と言ってよいでしょう。

いじめ未然防止に向けた取組を実施するとともに、早期発見・早期対応に向けた取組も併せて必要となりますが、いずれも「組織的」に推進することが大切です。

☆コラム いじめのアンケート

いじめのアンケートは、いじめの未然防止に向けた取組となるのでしょうか。

アンケートの記載内容から、いじめがあることを認知した段階では、未然防止の段階ではなく、早期に対応する段階となっていることから、未然防止に向けた取組ではありません。

確かに、アンケートを定期的に行うことにより、いじめへの抑止力になっている一面はありますが、「先生に怒られるからいじめない」といった考えで児童生徒は行動するかもしれません。未然防止に向けた取組で大切なことは「いじめはよくないことだ」、「友達と仲良くすることはよいことだ」などという考えを育てることです。

そこで、いじめ未然防止モデルプログラムでは、児童生徒が「学校は楽しい」、「友達っていいな」などと思える「居場所づくり」や「絆づくり」の考え方に基づいた活動例を示しており、いじめの未然防止について正しく理解することが大切です。

また、アンケートについては、児童生徒が回答しやすいよう「生活アンケート」という名称にしたり、「何か悩んでいることはありますか」、「嫌な思いをしていませんか」といった質問項目にしたりするなどの工夫が考えられます。

⑧いじめの未然防止とボランティア活動

様々なボランティア活動や地域の人々との幅広い交流など社会貢献や社会参加等に関する活動は、生徒が社会の一員であるということの自覚を深め、人間尊重の精神に立って社会の中で共に生きる豊かな人間性を養うとともに、自分を見つめなおし自己実現に向かって人生を切り拓く力をはぐくむ上で大切な活動であるといえる。（略）

教育的ねらいを十分に吟味し、学校の教職員全体の共通理解と適切な指導の下に、家庭や地域との連携・協力を十分に図りながら、生徒の自主的、自発的な活動が助長されることが必要である。

高等学校学習指導要領解説 特別活動編（文部科学省 H21）

ボランティア活動を行ったことそのものが、いじめの未然防止ではなく、ボランティア活動を行う過程の一つ一つが、いじめの未然防止につながると考えられます。ボランティア活動を通して、同学年はもとより、異年齢や異世代の人々と交流する中で自分の役割を理解させたり、自分が役に立っているという自己有用感を児童生徒にもたせたりすることが大切です。

そこで、次のような指導や活動を行うことが考えられます。

- ①活動のねらいと自分の役割を理解させる。
- ②教師や地域の人々が、活動について肯定的に評価する場面を位置付ける。
- ③自分や仲間の活動を振り返り、それぞれ肯定的に評価する場面を位置付ける。
- ④自己評価をシェアリングする場面を位置付ける。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、ボランティア活動の例を紹介していますが、いずれも地域の人々と触れ合う活動を通して児童生徒に自己有用感を育む活動です。

なお、ボランティア活動を「絆づくり」として位置付ける際は、教師の指導のもと、上で示した①②について、児童会・生徒会が中心となり、事前に集会等を行い、ねらいや役割を確認することが必要です。また、③④の結果をまとめ、便りとして配付したり、模造紙にまとめて校内に掲示したりすることも指導の充実を図るために大切です。また、これらのことが「環境づくり」の活動や情報発信につながります。

ちなみに、「いじめ未然防止モデルプログラム 校内研修パッケージ」においても、ボランティア活動をいじめの未然防止に向けた取組とするためのポイントについて説明していますので、併せて御覧ください。

☆コラム 生徒指導と学習指導の関わり

学校においては、確かな学力の定着を図るため、例えば、基本的な学習過程やノート指導の徹底、ICTの活用など様々な工夫が図られているところですが、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること、といった視点に立った働き掛けも大切です。

例えば、児童生徒の苦手なことについて、理解し、できるようになるまで指導し、達成感を与えたり、話し合い活動を位置付け共感的な人間関係を育成したりすることなどが考えられます。また、児童生徒が安心して学習に取り組むことができるよう、教室の清掃を徹底したり、掲示物の充実を図ったりすることなども考えられます。つまり、学習指導の中でも生徒指導が行われており、「居場所づくり」や「絆づくり」、「環境づくり」が実践されているということになります。

⑨家庭や地域社会との連携及び特色ある教育活動の地域への発信

学校がその目的を達成するためには、家庭や地域の人々とともに児童を育てていくという視点に立ち、家庭、地域社会との連携を深め、学校内外を通じた児童（生徒）の生活の充実と活性化を図ることが大切である。また、学校、家庭、地域社会がそれぞれ本来の教育機能を発揮し、全体としてバランスのとれた教育が行われることが重要である。

小学校学習指導要領解説 総則編（文部科学省 H20）
 中学校学習指導要領解説 総則編（文部科学省 H20）
 高等学校学習指導要領解説 総則編（文部科学省 H21）

各学校において、年間を通じて家庭や地域の人々の協力を得たり、様々な組織を活用したりする教育活動において、効果的な体験ができるよう計画を立てる際には、「綿密な打合せ」や「ねらいや成果などの情報発信」などの工夫が必要です。

また、年間指導計画の中に、家庭や地域と関わる項目を設けたり、地域の行事を記載したりするなど、様々な工夫を重ねて、常に連携の定着を目指していくことが大切です。年間指導計画の内容などの情報は、学校だよりやホームページなどを活用して、年度当初から積極的に広く発信することによって、より充実した教育活動の展開を図り、教育効果を確かなものにしていくことが望めます。

〈効率よく打合せをするための項目〉	
①目的・意図・ねらい	②参加者 ③時期、時刻、状況 ④場所 ⑤対象、内容 ⑥方法、手段
〈地域との連携を進めていく上での注意点〉	
○児童生徒に、挨拶の仕方や礼儀・マナーなどについて事前に指導しておく。 ○活動後の情報交換を行い、協力していただいた方からの意見を次の連携に生かす。 ○活動実施後には、活動の成果や児童生徒の感想などを地域の方に伝えとともに、意見を伺ったりして次の連携に生かす。 ○連携して活動するメリットが学校側だけのものにならないように、相手方のメリットも考えておく。	
〈情報発信の例〉	
○メールやホームページで、活動の様子を小まめに伝える。 ○学校便りや学級便り、児童会・生徒会便りで伝える。 ○授業参観で、学校行事を振り返っての発表会を行う。 ○児童生徒に活動の様子を保護者に話すよう声を掛けたり、保護者に児童生徒から話を聞いてもらうようお願いしたりする。 ○保護者にコメントを書いてもらい、学校便りや学級便り等で紹介する。 ○活動の様子を新聞社やテレビ局の記者に取材を依頼し、新聞の記事やテレビのニュースとして取り上げてもらう。	

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、家庭や地域社会と連携した活動を数多く紹介しています。すでに多くの活動を家庭や地域社会と連携して行っていることと思いますが、地域の人々と触れ合い、声をかけてもらうことは、児童生徒の自己有用感を育むよい機会となります。また、連携を円滑に行うために、学校が日ごろどのような活動を行っているのか、家庭や地域社会に理解してもらえるよう、学校や家庭、地域社会の実態に応じた情報発信を積極的に行うことが大切です。

⑩生徒指導と道徳教育の関わり

児童等の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人交流の能力の素地を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図らなければならない。

いじめ防止対策推進法第15条

いじめの未然防止に関わり、道徳教育においては、そのねらいを踏まえて、全ての教育活動を通じて、いじめが起きにくい学校・学級風土づくり、いじめに向かわない児童生徒の育成を目指します。とりわけ、いじめの未然防止においては、「相手のことを思いやること」や「友達と互いに理解し合うこと」などが大切なことから、各教科等においては、相手のよさに気付いたり、相手のために自分の役割を果たそうとしたりする活動を位置付けたり、相手の考えや自分の考えを大切に話す話し合い活動の充実を図ったりすることが考えられます。そのため、特別活動に、異年齢集団による交流を位置付けた活動を行う学校も見られます。

一方、道徳の時間においても、例えば、「親切、思いやり」や「友情、信頼」「相互理解、寛容」などといった内容項目を重点的に取り上げ、小学校であれば、思いやりの心をもつことの大切さについて深く考えられるようにしたり、友達のよさを発見することで友達のよさを理解したり、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重することで違いを生かしたよりよいものが生まれるといったよさなどを理解したりすることができるよう指導の工夫を図ることが大切です。

高等学校においては、小・中学校と異なり道徳の時間が設定されていませんが、学校教育全体を通じて道徳教育を行う必要があります。

いじめ未然防止モデルプログラムにおける活用のポイント

モデルプログラムでは、小学校の活動例 J において、いじめの未然防止に関わる道徳の時間と各教科等との関連について紹介しています。このような活動を推進するためには、①重点的に取り組む道徳教育の内容項目、②道徳の時間と関連を図る活動、について考えることが必要ですが、道徳教育は年間を通じて意図的、計画的に推進する必要があることから、これらについて道徳の全体計画に示すとともに、道徳の時間の年間指導計画及び各教科等の年間指導計画に位置付けることが必要です。

☆コラム 解決志向アプローチの考え方

解決志向ブリーフセラピーとは、問題よりも人々のもつ肯定的な側面に焦点を当て、そうなりたい自分（解決の姿）を実現させていくものです。

解決にあたって、問題にではなく、可能性のあるところ、少しでも変わりうるところに焦点を当てることを重視します。人々や子どもたちのもつリソース（資源）や強みを見出し、本人が望んでいる未来について話し合い、本人が内外にもっているものを利用して、その未来を実現できるように支援します。

学校では、悩みをもつ児童生徒に対して、問題点を見付け、その解決方法を教師がアドバイスをするという場面がよく見られます。解決志向アプローチは児童生徒がもっている資源（児童生徒のモチ味、得意なことなどと解釈できます）を生かして、児童生徒と一緒に解決方法を考えていくという考え方です。このことにより、児童生徒自身も悩みに真剣に向き合い、成長することができます。

また、教育相談（面談）に活用するだけではなく、児童生徒自身や仲間のよさやモチ味を見付ける活動にも活用できる考え方です。

解決志向アプローチと、いじめの未然防止が関わることについては、次のようなことが考えられます

- ・問題点に注目するのではなく、児童生徒がもっている資源を活用することで、児童生徒は、自分のよさやモチ味に気付くとともに、互いのよさやモチ味を認めることができる。
- ・解決志向アプローチの考え方を、学級経営や教科指導等に生かすことで、児童生徒自身や仲間のよさやモチ味を生かそうという雰囲気のある学校や学級づくりができる。

いじめ未然防止モデルプログラムにおいては、いじめが起こりにくい学校づくりを推進するため、「いいところ探しプロジェクト」など、仲間のよさを理解するといった活動例を示しています。